

## 第三節 教育と文化

### 1 戦時教育体制

国民学校 日中全面戦争の開始は、教育の軍国主義化に拍車をかけた。日中戦争開始二か月前の昭和十二年の発足（二十卷）五月『国体の本義』が配布され、戦時体制下の教育の基本理念が確立されたが、国民精神総動員運動が始まると、その影響が学校教育にも及び、国体觀念の高揚を目的とする諸行事が強化された。戦争の長期化にともない、軍隊の要員「人的資源」としての青少年への期待が大きくなり、十四年五月には「青少年ニ賜ハリタル勅語」が出された。学校教育の再編成が叫ばれるようになり、十六年四月一日から永年国民に親しまれてきた小学校にかわって、国民学校が発足することになった。

国民学校令（二十八年三月一日公布  
四月一日施行）第一条には「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ、国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」とあった。これまでと大きく変わったのは、義務教育の八年制と教科の統合であった。前者は、明治四十年（一九〇七）以来の六か年義務制を延長して、国民学校初等科六年と高等科二年の八か年を義務制とするもので、昭和十九年度からの実施を予定していた。しかし、戦局の悪化にともない、十八年十月の戦時非常措置方策の閣議決定によってその実施は見送られる。後者の教科の統合においては、初等科・高等科に共通する教科を、**国民科**（修身・国語  
国史・地理）、**理科**（算数  
理科）、**体錬科**（体操  
武道）、**芸能科**（音楽・習字・図画・工作のほか初等科女児に  
裁縫・高等科女児に家事および裁縫を加える）の四教科にまとめ、**高等科**はこれに**実業科**（農業・工業・商  
業または水産）を加えることにした。そして、**国民科**が皇国民鍊成の中心教科とされたので

ある。

国民学校では、すべての教科について国定教科書を使用することとし、初等科については修身科（ヨイコドモ）・国語科（ヨミカタ・コトバノオ）・算数科（カズノホン）・図画科（エノホン）・音楽科（ウタノホン）の各教科書のほか初等科国史・初等科地理・初等科理科などの教科書がつくられた（高等科についで省略）。教科書の編纂には、文部省図書局編纂課員があたったが、これに陸軍教育総監部の若手将校数人が加わり、天皇崇拜と軍国色の強い内容になったという。なお成績の評価の仕方も、これまでの一〇点法を改め、優・良（上下）・可・不可と改めた。

奈良市では、十六年四月一日、告示第二〇号を出して各小学校を国民学校に改めるとともに、第一〜第六の呼称をやめて、第一から順に椿井・飛鳥・鼓阪・濟美・佐保・大宮に改称した（表22）。女高師・師範・女子師範の各附属および旧郡部の近隣町村の各小学校も国民学校に改めたことはいままでもない。

少国民の錬成

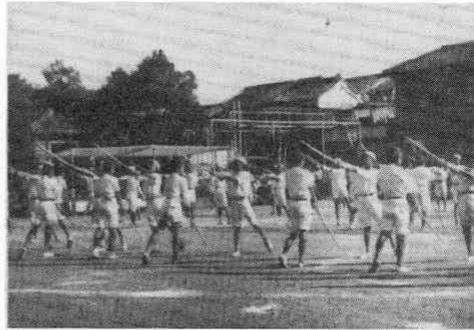
国民学校の発足を契機に、知育よりも心身一体の教育がいちだんと強調され、全校をあげて「少国民の錬成の道場」とすることが求められるようになった。飛鳥国民学校についてその一端をみておくことにしよう（『飛鳥市』）。  
 昭和十七年（西三）三月、県の指示があつて職員会議が職員常会に名を改めた。四月の臨時職員常会では、校長から「戦時下教育の指標」という県からの指令の説明があつたが、そこにはつぎの三点の指標があげられていた。

- 一 征戦ノ真義ニ徹シ忠誠ニ途、聖地（注、建國聖地）遺烈ヲ教学ニ具現スルコト

表22 新旧校名対照

新 校 名	旧 校 名
椿井国民学校	奈良第一 <sup>尋常</sup> 小学校
飛鳥 "	" 第二 " "
鼓阪 "	" 第三 " "
濟美 "	" 第四 " "
佐保 "	" 第五 " "
大宮 "	" 第六 " "
都跡 "	" 都跡 "

『奈良市公報』69号による。



椿井国民学校の武道訓練

一 逞シキ身体ヲ錬成シ、敢闘雄飛ノ実践力ヲ育成スルコト

一 科学心ヲ啓発シテ創造ニ勵メ、国策ニ協力シテ国防能力ヲ涵養スルコト

これより先、太平洋戦争に突入した十六年十二月八日の午後から戦勝祈願のため天神社、春日大社に参拝したが、以後毎月八日の大詔奉載日には、詔書を奉読し、必勝祈願分列行進、強行軍、献金などの行事を実施して、皇国民としての精神の注入と体位の向上をめざした。

職員には早朝出勤日があった。職員朝礼では一同「教育報国の誓」を唱え、朝の会では全校児童に「誓のことは」を宣誓させた。

体錬科の錬成には特に力が入られ、すべて軍隊式となり、スポーツ的な教科がなくなって国防的競技が多く取りあげられた。体育の時間、四年生以上の男子ははだしということに決った。教師ももちろんはだし、はじめ痛がっていた児童もすぐに慣れて、苦もなく走りまわったり跳箱をとんだりするようになったという。

武道は剣道と柔道、女子には薙刀なやたが課せられた。運動会では、相撲体操・薙刀体操・手榴弾投げ・城壁乗り越え・運搬競走などが人気を集めたという。模型飛行機大会を奨励して児童の空への夢をかりたて、「撃ちてしまむ」の習字作品を街頭に提示したり、四条畷神社や石清水八幡宮などに奉納したりもした。

高等科二年生に対しては、満蒙開拓青少年義勇軍（第五章第三節）への参加が勧奨され、毎年各校から三、四人程度の応募があった。十九年九月には、飛鳥国民学校など二校の学校長が、県から派遣されて満州の青少年義勇軍の視察に赴いている。

食糧不足が深刻化するにつれ、各国民学校の校庭も耕されて甘藷や野菜の畑となり、教育活動の一環として児童を開墾や栽培に従事させた。十九年四月からは、国民学校の児童も勤労奉仕に動員されるようになる(後述)。また、戦局が悪化して空襲の危険が大きくなると、学童たちは、防空ずきんを背負い、地区ごとにまとまって集団登下校するようになり、避難訓練なども繰り返し実施されることになった。

ついでながら幼稚園にもふれておくことにしよう。太平洋戦争がはじまると、幼稚園でも「皇国民の錬成」を保育目標に加えるようになった。昭和十八年ごろから幼稚園を保育所に転換するところも出てきた。空襲の危険が強まると、退避訓練に力を入れるようになり、警報とともに保育を打ち切って帰宅させるようになった。

奈良市では、十七年十月、市立東之阪町託児所を奈良市立若草保育園と改称、定員九〇人、満三歳以上の幼児を収容することにした。保育時間は季節によって異にしたが、およそ八〜十一時間であった。

敗色が濃厚になった二十年七月九日、奈良県当局から県下一円の子供園に閉園の通達が出され、市内の子供園はすべて休園になった。

**青年学校** 青年学校は、小学校卒業の男子を徴兵年齢まで教育することを主な目的としていたが、青年学校の義務化への就学者は都市部においてとりわけ少なかった。そのため昭和十四年(五三)四月から青年学校の男子義務教育制が実施された。

奈良市の青年学校は、第一〜第六の各小学校および都跡小学校に併置されていたが、十六年四月から小学校が国民学校になり、その名称も椿井・飛鳥・鼓阪・済美・佐保・大宮に改められたので、青年学校もこれに応じてその名称を改めた。その教育内容は、補習教育・職業教育・軍事教育の三分野からなっていたが、戦争が激しくなるにつれ、教練を中心とする軍事教育に重点がおかれるようになった。

近郊町村でもそれぞれ青年学校を設置していたが、十九年三月、帯解町ほか八か町村の青年学校を統合して、平担部組合立帯解青年学校が開設された。大安寺村では、翌四月に村立女子青年学校を設けている。

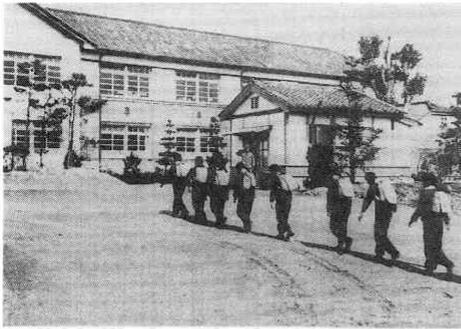
なお、昭和十六年の規程で、国民学校高等科と青年学校の授業料が改定された。一か月につき国民学校高等科は一円、ただし都跡国民学校は、当分のあいだ二〇銭、青年学校女子部は一円、ただし都跡青年学校は当分のあいだ五〇銭となった。翌十七年四月から国民学校高等科の授業料が八〇銭に改められた。

**中等教育**　すでに満州事変以来軍事色を濃くしていた中等学校は、戦争の進展にともない戦時特色を強めていった。**軍事化**　た。奈良中学校と市立奈良高等女学校について、これを見ておこう（『奈良県立奈良高等女学校五十年史』）。

奈良中学校では、昭和十四年（五三）五月の「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」を受けてのことであろう、翌六月に下記の誓詞を制定して七月から朝礼に朗読することになった。

吾等は奈良中生なり、行作その矜持に生き、誓って国土魂を練成し、以て各自の大器を成就し、皇運扶翼の  
国土たらんことを期す。

また、同月から毎週土曜日の放課後に歩行訓練を行うことになった。各組または各学年ごとに、無言のまま歩調を整えて四〇〇キを行進して心身の鍛練をはかったのである。翌十五年七月には山田川―木津への二四〇キ行軍、十月には午後十一時校庭を出発、上級・中級・初級に分れ、大和盆地をめぐる八〇〇キの鍛練行軍が実施された。軍事教練が強化され、軍にならって衛兵・校外巡視を任とする週番制が採用された。十五年七月に北郡山・富雄付近で徹夜軍事演習が行われ、十六年には銃剣道部も生まれた。十四・十五両年の夏休に静坐修養会が開催され、十四年春から毎年五月に皇陵参拝を実施、十八年十一月には六社巡拝三八〇キの行軍も行われた。昭和十六年から勤勞奉仕も始まるが、これについては後述するとして、勤勞奉仕による学力低下を防ぐため十七年から夏休を二〇日間



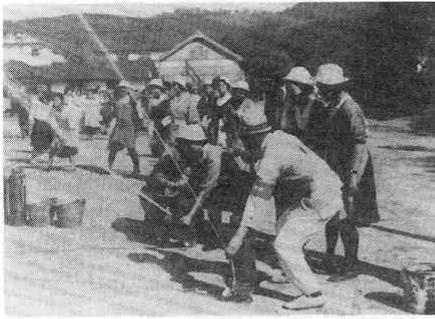
市立高女生徒の登校風景

に、冬休を六日間に短縮、土曜午後も授業を行うことにして週三六時間の時間割を組んでいる。

いっぽう、奈良市立奈良高等女学校は、十六年四月大宮小学校北館を仮校舎として開校したが、十七年四月から法華寺町の新校舎に移った。その草創期から「有為なる皇国女性」の育成を目ざし、報徳会（隔月一回二宮尊徳の勤勞精神の理解）・皇陵参拝（春秋）・克己日（毎月六回一と五日）に備案な朝食を行う）・奉仕作業（隔月一回、御陵・神社の清掃）・農場実習（毎月一回、全日農作業を実施）などの行事を組んでいた。体位向上のため徒歩通学が強制され、毎日八キロの道を歩いてくる生徒も少なくなかったという。十八年になると朝礼時に隊伍を整えて行進の訓練、体育の時間には薙刀の練習をするようになり、防空救護演習や雑草料理の研究にも励むようになった。

昭和十八年一月、皇国民の錬成を目的に中等学校令が公布され、四月から国民学校にならって教科の統合が行われるとともに（中学校では四教科のほか三年以上選択、女学校では四教科のほか家政科を基本教科とし、家政・外国語・実業は増加教科とする）、新たに修練科が設けられて正課に加えられた。修練科は週三時間、行的訓練を重視して心身を鍛えるものであった。「時局の要請」で修業年限が短縮され、五年の学校は一年短縮して四年に統一された。教科書は原則として国定となった。

各中等学校が中等学校令で統一されたのに応じ、金鐘学園では、十八年四月金鐘中等学校を廃止して金鐘中学校を設立、十九年二月奈良専修女学校を金鐘女子商業学校に改称した。奈良育英学園では、十八年四月奈良育英高等実践女学校を廃して奈良育英高等女学校に一本化し、初等科卒業生を入学させる一類のほかにも高等科卒業生を入学させる二類（修業年限三年）を設けた。また、



奈良女高師の防空演習（昭和15年）

正気書院商業学校は、十八年正気商業学校と改称、翌十九年二月女子商業学校に転換して四月から校名を正気女子商業学校に改め、二十年五月に専攻科を設けた（戦後、奈良女子商業学校と改称、のち奈良白藤高等学校となる）。南都正強中学は、十九年二月に校名を奈良県正強中学校と改称した。女高師附属高女では、十九年四月旧美科高等女学校の第二部を併合、翌二十年四月専攻科（修業年）を設ける。なお、十六年四月に帝塚山中学校の創設をみており、十九年四月には県立奈良商業学校に県立奈良工業学校が併置された。

中等学校令にもとづいて、各校とも教育内容の改編をすすめたが、その実があらならないまま軍事訓練と勤労働員が強化されていった。十九年八月には学徒勤労令（中学生以上全員を工場に配置）が出て教育機能が事実上停止となり、二十年四月から国民学校初等科を除き学校における授業が停止された。

奈良師範 小学校教員養成を目的とする奈良県師範学校では、国家の要と女高師 請を強く反映して、他の学校より早くから戦時色の濃い教育

が行われ、国民学校の発足とともにいっそうその傾向を強めた。昭和十四年（一九三九）に奈良県師範学校の生徒寮が完成（校舎や附属小学、校も改築された）、全寮制がとられたが、寮の規則がきびしく、寮生活は軍隊の内務班同然であった。太平洋戦争がはじまると軍事教練が強化され、毎年七月七日に夜間行軍を実施することになった。

昭和十八年三月師範教育令が改定され、「皇国ノ道ノ修練ヲ旨トシテ、克ク皇国民鍊成ニ任ズベキ人物ノ鍊成」を目的とすることになった。奈良県師範学校・奈良県女子師範学校は、統合されて奈良師範学校の男子部・女子部となり、

専門学校に昇格して官立に移管された。三年制の予科(国民学校高)を置くとともに研究科(女子部に)を置いて現職のまま教員を入学させることにした。予科の修業年限が二年に改められたので、十九年四月には予科三年生と二年生が同時に本科に進むことになった。

昭和十七年から大学・専門学校の在学年限が六か月短縮になっていたが(十六年に三か月短縮、高等学校と大学、)十八年十月大学の学生および高等・専門学校生徒の徴兵猶予が停止になり、法文系学生・生徒の大半は、同年十二月各地の軍隊に入隊した(理科系は。徴兵延期)。いわゆる学徒出陣である。師範学校卒業生の短期現役兵制度は、十五年度から廃止になっていたが、このとき師範系の生徒は特別に徴兵猶予を認められた。しかし二十年二月にはこの特例が廃止になり、同年六月、奈良師範学校男子部本科三年生の大半が中部第二十三部隊(大坂)などに入隊した(十八年十二月徴兵通令が一年引き下げられた)。奈良女子高等師範学校では、昭和十六年一月に校友会を改組して報国会としたが、九月には報国隊を結成して防空演習や農村勤労奉仕に活動するようになった。十七年在学年限が六か月短縮となり、十八年三月の師範教育令の改正で、女高師もまた「皇国ノ道ニ則リテ高等女学校ノ教員タルベキ者ノ錬成」を目的とするようになった。

昭和十七年四月、女子臨時教員養成所が付設され、修業年限三年の数学科が設置されたが、翌年四月家事科(十九年四月家)が増設された。ついで翌十九年四月には、軍人・軍属の寡婦またはその事実上の妻だった者を対象に特設中等教員養成所が開設された(初年度の八)。これは十四年九月軍事保護院の管轄下につくられた特設保姆養成所の後身だったとみられる。

#### 勤労奉仕

日中戦争によって青壮年男子がつつぎと軍隊に召集されると、農村などでは労働力が不足するようになった。これを補うため、昭和十三年(五三〇)六月、文部省は「集团的勤労作業実施ニ関スル件」を地方長官と官立学校長に通牒、中等学校以上の学生・生徒を勤労奉仕に動員するようにし、翌年四月か

ら勤労作業を正課に準ずるものとした。ついで十六年に入って文部省は、「食糧ノ確保増進ニ寄与」させるため青少年学徒食糧増産運動を実施し、一年を通して三〇日以内、授業に代えて農作業などの勤労作業に従事させる措置をとり、八月には学校報国団(隊)の編成を訓令した。

こうした政府の方針にしたがい、市内の中等学校以上の各学校でも農繁期に市内や近郊の応召農家に赴いて農作業を手伝うとともに開墾や暗渠排水工事などにも汗を流した。このほか建国奉仕隊に加わったり(權原神宮外苑整、備工事に従事)、護国神社や御陵参道の整地工事や陸軍衛戍病院の整美作業などにも参加したりした。『奈良県立奈良高等学校五十年史』の「沿革小史」によって奈良中学校と市立奈良高等学校の場合をみると、およそつぎのとおりである。

昭和十三年	六月二十四日	奈 中	全校生徒・建国奉仕隊参加
昭和十四年	八月 十一日	〃	建国奉仕隊参加(三・四・五年)
〃	十月 六・七・十四日	〃	元明・元正御陵参道工事奉仕
〃	十一月 十五日	〃	建国奉仕隊参加(金学年)
昭和十五年	四月 十六日	〃	護国神社整地
〃	五月 七日	〃	陸軍病院花壇手入れ(三A・三B)
〃	六月 八日	〃	応召農家麦刈奉仕(二〇五年)
〃	七月 二十一・二十八日	〃	各組交代で神社奉仕・陸軍病院花壇手入れ
〃	十一月 十六日	〃	元明・元正天皇陵清掃作業(一・二年生)
昭和十六年	六月四〜七日	〃	農繁期奉仕(法華寺・川上町)
〃	六月 十三・十五日	〃	農繁期奉仕(都跡町方面)

第五章 戦争と奈良

昭和三十八年	八月十八・十九日	高女	御陵・神社清掃
"	十月 九日	"	陸軍病院清掃
"	十一月九・十二日	奈中	農繁期奉仕(白毫寺・佐紀町)
"	十一月 十八日	"	農繁期奉仕
昭和十七年	一月 十二日	"	大阪砲兵工廠祝園部隊に奉仕(四年)
"	二月 十二日	高女	陸軍墓地清掃
"	五月 十二日	"	護国神社奉仕
"	六月二・三日	"	農繁期奉仕
"	六月六・十三日	奈中	農繁期奉仕
"	七月 十八日	"	陸軍病院奉仕(二年)
"	十月十・十一日	"	勤労奉仕(法華寺・七条町方面)
"	十一月十・十一日	"	農繁期奉仕
"	十一月十七・十八日	"	同右
"	十一月六・九日	高女	勤労奉仕
昭和十八年	六月十二・十三日	奈中	農繁期奉仕(明治村・東市村など)
"	六月十六・十七日	"	農繁期奉仕(辰市村・大安寺村など)
"	八月 六日	"	五条山勤労奉仕
"	八月二十一日	高女	勤労奉仕(農場・茶業試験場)
"	八月二十七日	高女	

〃 十月五〜七日 〃 増産奉仕作業

〃 十一月十一〜十三日 〃 農繁期奉仕

〃 十一月 十三日 奈 中 同右（法蓮町・七条町など）

〃 十二月十四日 高 女 小用排水工事

〃 十二月二十三日 奈 中 炭材運搬・河川修築工事

〃 十二月二十八日 〃 暗渠排水工事（五年）・菰川改修工事（二〜四年）

昭和十九年 一月十一〜十九日 〃 奈良飛行整備学校（第三十八連隊のあとに入った岐阜陸軍）へ奉仕（約七〇名）

〃 三月 三十日 〃 農繁期奉仕

〃 六月十〜十四日 〃 同右（託児所開設）

他中等学校はもとより奈良師範や女高師においても、ほぼ同様の勤労奉仕に赴いたものとみられる。国民学校の児童も（（だいたい四年以上））農家の手伝いや神社の清掃などの奉仕にしたがった。十九年のことになるが飛鳥国民学校では、五月に五年生以上が背無川改修工事に奉仕したり、薪の運搬（（六月二十日））や木材の搬出（（八月二十六日））の奉仕をしているほか、藤蔓（つづみ）など雑繊維材料の採集にしたがっている。また、鼓阪国民学校でも、初五以上が田原村での薪の搬出したがったり（（十月））、翌二十年に初四以上が佐紀町で薪搬出の奉仕をした（（三月十三日））ことが知られる。市周辺の村々では、国民学校児童の多くは農家へ勤労奉仕に赴いた。

学徒勤動員（（学徒））が本格化するのには、昭和十八年（（四））六月、学徒戦時動員体制確立要綱が閣議決定されたからのもので、これによって生産・輸送の各方面に学生・生徒が組織的に動員さ

れるようになった。ついで翌十九年一月の緊急学徒勤動員方策要綱によって、年間四か月を継続して動員するこ



学校工場（市立高女）

とが決定、ついでは三月には学徒勤労動員の通年実施（通年）が決められた。労働力の不足が、いよいよ深刻になってきたためである。五月には、学校工場化実施要綱が出て、学校そのものが工場や病院に使われるようになった。そして七月からは、国民学校高等科・中学校低学年の生徒も動員体制の中に組みこまれることになる。

奈良市内の学校の生徒たちも、相ついで工場その他へ派遣された。奈良市立高女をはじめ育英高女・女高師附属高女・奈良商業・正気商業・奈良師範などに学校工場が開設され、生徒がその作業要員になる場合もあった。

奈良市の各学校の動員状況を、沿革史や校史などについてみると、およそつぎのとおりだが動員期間は、必ずしもはっきりしない。

動員先にあげられている大和海軍飛行場・大和海軍航空隊・柳本飛行場について一言ふれておくことにしよう。昭和十八年十二月からいまの天理市に三重海軍航空隊奈良分遣隊がおかれ、天理教誥所を宿舎に一万人をこえる予科練（海軍飛行予科練習生）への教育が行われていたが、二十年三月に独立して奈良海軍航空隊と改称した。その予科練の飛行練習場として十九年九月ごろから柳本飛行場（用地の九割は当時朝和村にあった）の建設工事がはじまり、二十年二月に大和海軍航空隊が開設された（七月に近畿海軍航空隊大和基地となる）。大和海軍飛行場あるいは大和海軍航空隊とあるのも、柳本飛行場のことである。飛行場の建設・整備工事には、各種団体や町内会、強制連行された朝鮮人のほか、多くの生徒が動員され、柳本飛行場建設学徒特攻隊と呼ばれたりもした。

△国民学校▽

椿井国民学校……高等科男女が大和海軍飛行場へ（昭和二十年一月以降とみられる）。

飛鳥国民学校……十九年十月二十五日に高二男子が整備学校教育隊八尾鉄工場、高二女子が帝畜産業へ。

鼓阪国民学校……十九年十月二十五日に高二男子が奈良郵便局、高二女子が奈良統麻会社へ。二十年三月二十四日高一が大和海軍航空隊へ。

済美国民学校……十九年十月二十五日に高二男子二九名が木興工場、五名が大阪鉄道管理部、高二女子一八名が国際無電中継所、二四名が日本統麻会社、二名が大阪通信講習所、八名が大阪鉄道管理部へ。二十年四月三日から五月五日まで高一・高二生が大和海軍飛行場へ。

大宮国民学校……十九年九月二十五日に高一男子が文明商会、女子が大和製機・安田鉄工場、高一男子が興亜機械、女子が吉川蚊張工場へ。

佐保国民学校……十九年十月二十五日に高二男子が小野・安田鉄工所、高二女子が吉川機械製作所へ。

奈良師範附属国民学校……十九年二期から高等科二九名が古川機械会社、二十年六月三日から紀寺町の大日本重工業奈良工場へ。椿井国民学校高等科生とともに職場学徒隊を編成、七月九日奈良県学徒隊の傘下に入った。仕事は魚雷の製造だったという。

女高師附属国民学校……十九年秋から二十年にかけて柳本飛行場の建設作業に。

明治国民学校……十九年十月二十五日から五か月間、高一男子が中部第五六五部隊、高二女子が奈良郵便局へ。二十年三月二十三日から一か月間、初四以上が柳本飛行場へ。

平城国民学校……十九年十月二十六日に高二男子が吉川機械、女子が奈良染織へ。二十年三月十二日から高一男女が柳本飛行場へ。

帯解国民学校……二十年三月から約一か月柳本飛行場へ。

東市国民学校……二十年六月に初五以上の男子が鹿野園溜池工事に。

富雄・精華・辰市国民学校……二十年に柳本飛行場へ。

〈中等学校〉

奈良中学校……十九年七月十五日から三年生以上が愛知県の大日本兵器幸田工場へ(二〇〇機関砲の製作に従事)。二十年三月二十八日工場

で卒業式挙行。二十年四月から一、二年生が柳本飛行場へ。

市立奈良高等女学校……十九年九月に陸軍大阪被服廠の分工場になる、三・四年生がその作業要員となり、おもに軍服のボ

タンづけや軍用蚊張の縫製にしたがった。二十年三月から一・二年生が柳本飛行場へ。

奈良商業(工業)学校……商業の四・五年生四〇〇名が三菱重工業名古屋発動機へ(勝チフスがひろがり、職員一人生徒一、二人が感染死するという犠牲を出した)、二十

年三月に四・五年同時に工場で卒業式、全員専攻科に入学してそのまま作業に従事。三年生は泉下の工場、一・二年生

は柳本飛行場へ。なお、学校は松下電器の通信機器の工場となる。

奈良育英高等女学校……十九年七月から、専攻科二年生と実践高女三年生が愛知県安城町の愛知航空今村工場(郡山高女・高師附属高女の生徒と同じ、寄宿舎に同宿)、二類二年生が松下無線郡山工場と奈良染織西大寺工場へ、学校には大阪機材(のち大坂金庫)の学校工場が開設

され、一類四年生がその作業要員となった。二十年七月に三菱電機の工場もできたが、工事が完成しないまま敗戦となっ

た。

正気商業学校……十九年七月から三・四年生が名古屋の愛知時計株式会社へ。二十年四月に一年生が柳本飛行場や京終のテ

イチク工場へ。なお、二十年六月に東洋合成化学株式会社の学校工場が開設された。

女高師附属高等女学校……三・四年生が愛知航空機安城工場へ。学校は大阪被服廠の分工場となり、野戦蚊帳の縫製や肩章

の製作にあたった。二十年春に三菱電機の分工場もつくられたが、実質的な生産に入らないまま敗戦となる。

帝塚山中学校……十六年に開校したばかりだが、十九年から三・四年生が三菱重工名古屋発動機製作所へ。工場全壊後京都三菱桂工場や山科の鐘紡工場に移った。一・二年生は柳本飛行場へ。

### 〈専門学校〉

奈良師範学校……十九年一月に男子部生徒が室生村三本松の湿地田の暗渠排水作業に従事(十三日)。二十年五月に東里村

下笠間(現釜)の灌漑用溜池の築造工事に従事(十四日)。この池は現(在も「師範池」とよばれている)。

十九年五月から男子部本科生が大坂桜島の日立造船所へ。七月から予科二・三年生が、二十年一月から予科一年生が、愛知県の大日本兵器幸田工場へ。女子部では本科生が大坂陸軍砲兵工廠祝園部隊へ、予科二・三年が京終の松田航空へ。

また二十年二月から本科一年生と予科生が愛知化学蒲郡工場へ。二十年四月、学校の校舎が兵器工場に転用されたため、愛知化学や大日本兵器などへの動員が解除され、学校工場で働くことになった。

奈良女子高等師範学校……十六年一月に文・理三年生と各科一年生が大坂陸軍補給廠へ、十七年四月から翌年五月にかけて一〜三年生が中部第六七部隊へ、いずれも断続的に派遣されていたが、十九年十一月から本科二・三年生約二〇〇名が舞鶴海軍工廠へ出動、ついで翌二十年二月から文科と家政科の一年生と臨時教員養成所生もこれに合流した。

なお、県立盲啞学校の生徒も吉野町の榎谷木工所に動員され、校内には卒業生の作業場が併設されて木工・金工・縫工などにしたがった。

学童疎開 戦局が悪化するにつれて、奈良への空襲の危険が大きくなった。政府は、昭和十八年(二五)末の受け入れに閣議決定された「都市疎開実施要綱」(東京・大阪など十二都市に適用)にもとづき、大都市の学童の

縁故疎開をすすめたが、翌十九年六月、政府は「学童疎開実施要綱」を決定、縁故疎開ができない児童を集団疎開させることにした。その対象となったのは、東京・横浜・川崎・横須賀・名古屋・大阪・神戸・尼崎・門司・小倉・

第五章 戦争と奈良

戸畑・若松・八幡の一三都市の国民学校初等科  
三年以上六年までの児童であった。

奈良県は、大阪市の疎開児童の受け入れ先となった。大阪市の対象児童のうち約一二万人が縁故疎開と決定し、残る六万六九八三人が大阪府内のほか一一府県に集団疎開したが、奈良県では、そのうち二七校（（生野区二校、東成区一校、天王寺区六校））の一  
万八一三人の児童を県内五四市町村で受け入れた。大阪市の集団疎開は八月二十八日にはじまったが、奈良県には九月八日から十日にかけて各疎開先に落ち着いた。

奈良市に集団疎開してきたのは、御幸森・生野・林寺の三国民学校の児童で、御幸森校は五一五人（（派遣訓導は校長のほかに一七人））、生野校八六三人（（派遣訓導は校長のほかに一七人））、林寺校四八七人（（派遣訓導は校長のほかに一七人））で、（寮舎）には市内と近辺の旅館や寺院・教会があてられた。各校の寮舎は表23～25のとおりで、各寮舎には寮母と作業員が配置され、寮医も委

表24 大阪市生野国民学校学童疎開受け入れ状況

(昭和20年1月)

受け入れ校	人数	寮 舎
済美国民学校	110 <sup>人</sup>	月の家
大宮国民学校 樺井国民学校	120	いろは
大宮国民学校 樺井国民学校	118	大和
大宮国民学校 樺井国民学校	52	住吉
大宮国民学校	43	あびす
佐保国民学校	43	大黒
済美国民学校	48	朝日
佐保国民学校	84	きくや
大宮国民学校	49	油屋
佐保国民学校	25	大仏
佐保国民学校	48	崇徳寺
佐保国民学校	47	称名寺

表23 大阪市御幸森国民学校学童疎開受け入れ状況

(昭和20年1月)

受け入れ校	人数	寮 舎
鼓阪国民学校	97 <sup>人</sup>	日の出
鼓阪国民学校	101	玉屋
鼓阪国民学校	52	若草
鼓阪国民学校	30	南都
飛鳥国民学校	42	好生
飛鳥国民学校	87	吉田屋
飛鳥国民学校	106	大文字屋

表25 大阪市林寺国民学校学童疎開受け入れ状況

(昭和20年1月)

受け入れ校	人数	寮 舎
平城国民学校	51 <sup>人</sup>	転輪教会
伏見国民学校	50	富久ノ家
都跡国民学校	110	業師寺

注 林寺校は上記のほか郡山町に5か所の寮を開設していた。

囁された。

疎開児童は、縁故疎開児童をもふくめ、市内や近辺の国民学校に通学したが、二十年一月現在の受け入れ状況は表23〜25にみられるとおりである。いま、市内の各校の「沿革史」などによれば、受け入れの日時を異にしているが、鼓阪・飛鳥の両校では、本校児童との交歓会を開くなどその融和に努めた。また、飛鳥校では児童数が急増したため、二十年四月の新学期に一年級六〇人の学級編成にしたという。なお、大安寺国民学校では二十年一月、生野校の集団疎開児童五四人を受け入れ、帯解国民学校でも十九年から二十年にかけて縁故疎開児童六二人を受け入れている。また、二十年四月には大阪の帝塚山学院の初等科三〜六年生の児童約三五〇人も、伏見村（現藤）の帝塚山中学校校舎へ疎開してきた（そのころ、帝塚山中学生は名古屋の三菱發動機へ動員されていた）。

ところで、二十年二月十日の午前三時ごろ国鉄奈良駅前の日の出旅館から出火、折からの西風のために玉屋旅館・ゑびす旅館など九戸が類焼し、四戸が半焼するという大事になった。火元の日の出旅館は御幸森校の六年男子約一〇〇人の寮舎になっていて、在宿中の児童二人が焼死するという不幸にも見舞われた。玉屋旅館も御幸森校の女子児童約一〇〇人の寮舎で、生野校の児童の寮舎になっていた、ゑびす旅館そのほかも全焼し、多数の児童が焼け出されたことになる。急ぎよ、かわりの宿舎が用意され、御幸森校の児童は魚佐旅館と金波旅館に移った。生野校の児童については、全面的に寮舎の再編をして、新しい宿舎を準備したうえ、一七か所に分宿することになった。火災からおおよそ一〇日後に、六年生の児童は大阪の本校で卒業式を迎えるため、受け入れ校で退校式・送別式をしてもらって大阪へ戻った。新三年生を迎える準備にかかったところ、三月十四日の夜の大空襲で、大阪は大きな被害をうけた。そのために、新三年生のほか、新一・二年生も疎開することに決定したから、奈良でも四月にこれを受け入れている（飛鳥校では四月十四日に受け入れている）。

空襲ははげしくなるいっぽうであり、大阪は焦土と化していった。同年六月には御幸森国民学校も焼失した。空襲で罹災した家庭は、縁故を求めて各地へ疎開したから、子どもをそこへ引きとるようになったので、奈良への疎開児童もしだいに減っていった（安彦勲著「学童集団疎開」受け入れ側の奈良県の場合、木村博一先生退官記念会編「地域史と歴史教育」所載参照）。

## 2 戦時下の文化

紀元二千六百年 紀元二千六百年にあたる昭和十五年（西暦）、「建国の聖地」大和は、橿原神宮を中心にその奉祝と文化 化でにぎわった（第五章第 一節）<sup>3</sup>。しかし、日中全面戦争がはじまってすでに四年、国家主義・軍国主義

が高まるいっぽう、自由な文化活動に対する抑圧はいちだんときびしくなっていた。この年二月には、津田左右吉博士が、その著『神代史の研究』など古代史研究の四書が皇室の尊厳を冒瀆したという理由で起訴されるという事件もあったりした。十一月十日中央での奉祝式典が行われ、県下の奉祝行事も二十四日に終わったが、紀元二千六百年の奉祝は、国民を超国家主義・天皇主義に統合し、戦時体制へ総動員する役割を果たした。

奉祝事業としての橿原神宮神苑の拡張整備が実現、七月に橿原文庫、十一月に大和国史館（現橿原考古学研究所・同附属博物館）が開館した。紀元二千六百年を記念して、十一月には、東京帝室博物館（立博物館）で正倉院御物特別展観も開催された。また、中野文彦によって吐田郷村名柄（現御所市）に大和地名学研究所が設立されたのも（現在奈良市六条一丁目）この年のことであつた。

紀元二千六百年をあてこんだ本が数多く店頭に並んだが、必ずしも際物ばかりではなかった。大和の歴史に関しては、この年、『聖地大和』と『大和二千六百年史』の二著が刊行された。前者は鉄道省が編集した小冊子だが、

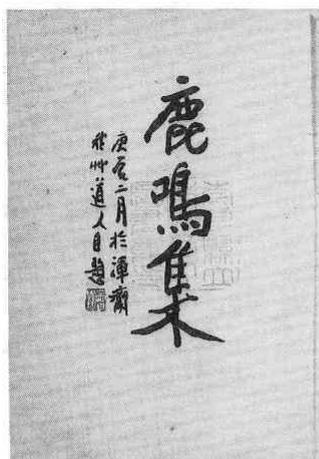
神武天皇の聖蹟や歴代陵墓・神社だけではなく大和の文化の源流や伝統などを通記したもので、聖地巡礼の格好な参考となるものであった。後者は、奈良県奉祝会の企画により、京都帝国大学の西田直二郎教授が中心になって編集したもので、初めての奈良県通史であった。西田の序文によれば、この書は「大和の国とその文化を深く追念し」、「太古悠遠の時に筆を起し、現代に至るまでの大和の歴史を通説し」、「特に日本歴史全体の立場より、大和のもつ意味を考察せんとした」概説書であったが、時代の制約から、『日本書紀』の作為を承知のうえで、神武天皇は「畝傍の橿原に都を開き給ひ、宝位に臨み元元を鎮め給うた。正に是れ紀元元年である」として筆をおこさねばならなかった。関西急行電鉄(現近鉄)の近畿観光会も、紀元二千六百年の記念に大和史蹟叢書を発刊した。これには源豊宗の『大和を中心とする日本彫刻史』や末永雅雄の『大和の古墳墓』などの好著も含まれていて、なかなか実な大和案内のシリーズであった。

なお、この時期奈良郷土会が地道な活動をつづけ、十七年に『奈良叢記』を発刊、翌年には高田十郎の『奈良百題』も出た。

すでにふれたように、昭和十六年、県下の地方新聞は一県一紙の方針のもとに『奈良日日新聞』に統合されたが、統制の波は美術界にも及んだ。昭和初期の奈良の洋画壇には、奈良洋画会・東台会・奈良美術家連盟などがあったが、政府の指示にしたがって十六年に統合、奈良県美術家協会が結成された。これには、洋画のほか日本画・彫塑・工芸の部門も含まれていた。

大和への回帰 「聖地大和」の高揚もさることながら、戦争がきびしくなるにつれ、奈良・大和への回帰のうねりも高まった。すでに昭和十一年『日本の橋』を著し、『古寺巡礼』の美学を批判して日本美の

伝統を説いた日本浪漫派の旗手保田与重郎は、十七年の『万葉の精神』にいたる一連の著作において、しばしば彼



『鹿鳴集』扉

の郷土大和について語った(保田は桜井市の出身)。十六年に井上政次の『大和古寺』が世に出たが、この時期大きな影響のあったのは、保田と同じ日本浪漫派の亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』であった。亀井は十二年以来、毎年春秋に大和の古寺をめぐり、六年後の十八年にこの本を上梓した。彼の念頭にはゲーテの『イタリア紀行』があり、再生の道を求めて「日本のローマ」大和を訪ねたのであった。彼は美術として仏像を巡礼した和辻哲郎の立場を排し、仏像は語るべきものではなく拝し祈るべき仏身にほかならないとし「信仰のありがたさ」に行きつく。求道遍歴の書としてこの本は、戦争の不安にゆらぐ人々の心に響くものがあった、大和への新しい誘いとなった。しかし、「飛鳥白鳳天平三代にわたる宗教と芸術の開花は、ひとえに歴代天皇の大御稜威(おおいづゑ)の然らしむるところであって」、六年間の古寺巡礼の最大の悦びが「天皇ならびに太子の御悲願の博大にふれ奉ったことだ」とした結びに、共感できない人も多かったはずである。

文学のうえでは、亀井とほぼ同じころ大和を逍遙した堀辰雄も、十八年の『婦人公論』に「十月」以下の作品を連載して(戦後「花あしび」にまとめられ増補さ、大和路・信濃路に収められる)人々を大和に誘ったが、その年折口信夫は、中将姫伝説に取材して大和を舞台にした「唯一の古代小説」(堀辰雄のことば)『死者の書』を出版した。しかし、影響の大きかったのは、『南京新唱』全篇を収めて十五年に出版された会津八一の第二歌集『鹿鳴集』であった。会津は二年後の十七年、歌を主題にした随筆集『渾齋隨筆』を著して奈良・大和への関心を高めた。奈良在住の歌人前川佐美雄(新庄町出身)は、九年に『日本歌人』を創刊してこれを主宰したが、日本浪漫派

との交流を深め、十五年の『大和』以降毎年のように歌集を出版、浪漫的歌風によって独自の地歩をきずいた。出陣の前に『万葉集』に情懷を托して万葉の故地を訪れる学徒は多かったが、十八年に河合村(現河)の人堀内民一の著した『万葉大和風土記』は、学問的著作ながらそのよき導きとなった。

なお、戦争が激しさを加える中、昭和十八年に興福寺の薪金が再興されたことが注目される。薪金は明治以来久しく中絶していたのだが、宮武佐十郎(製墨業春松園八代目当主、金春流の謡曲師でもあった)ら有志がその復興を願い、母体として奈良興福会の結成にこぎつけたのが十七年十一月のことであった。奈良興福会は総裁に近衛文麿、副総裁に春日大社宮司水谷川忠麿、会長に奈良県知事堀田健男を推挙し(副会長は松井貞、本館と関係太郎)、「興福寺伽藍再興等二往古ノ諸議式ヲ復興シ益々皇道ノ宣揚日本精神ノ作興ヲ図ルヲ以テ」目的としていた。宮武らは、この後準備に奔走、翌十八年五月七、八の両日、興福寺南大門跡の扇芝でめでたく新御能を奉納することができた。両日とも好天に恵まれ、二日間の陪観者六五〇〇人、五月九日付の『朝日新聞』奈良版は、「前日に引続く白衣の勇士ら千余の観衆の熱心な瞳のもと、順次番組を進め日没とともに篝火を焚いて参観者を古典情緒にひたらせ九時すぎ決戦下意義ある復興第一年の行事を終った」と報じている。翌十九年は、四月一日から三日間の修二会の勧修に続いて、四、五両日に執行された。「戦局重大の折から時局にふさわしからぬ興行の如く解する向き」(『大阪朝日新聞』奈良版五月九日付)もあつたらしいが、能楽四座の家元が揃つて奉仕する盛儀だったという。「敵国降伏、国威宣揚、出征兵士武運長久並に五穀豊穡の祈願」をうたった「決戦下神事御能」(五月十日付、陪観案内状)であつたが、翌二十年は戦局悪化のため中止となつた。

奈良における戦時中の大きな文化問題に、文化財の疎開があつた。

#### 御物の疎開

奈良で寺社の国宝(昭和四年の国定保、存法による旧国宝)の疎開が始まるのは昭和十九年(九四)に入つてからのことだが、すでに十六年三月、東京帝室博物館(現東京国)では、有事の際における御物(皇室の)ならびに保管美術品の処

置方針をまとめ、八月から十一月にかけて、法隆寺献納御物および館蔵最優秀品三三五点を、四回に分け奈良帝室博物館(現奈良国立博物館)に移送した。奈良へ疎開させたのは「軍部ノ調査ニ依レバ奈良ハ宮内省関係地方トシテ防空上第一位ニ属スル安全地帯だったからである(当時奈良県には、歩兵第三十八連隊以外に軍事施設はなかった)」。奈良博では、東京帝室博物館からの移送品を収蔵庫の階下を半分に使切って収納したが、そのため収蔵庫が手狭になったこともあって、以後寺社からの寄託品の返却を急ぐことになる。実はこの年七月、奈良博に地下収納庫をつくる計画があったのだが(完成に先だって危険は、正倉院御物とともに旧大仏鉄道のトンネルに防湿装置をし、これは立消えになった。)、これは立消えになった。

正倉院でも同じころ、宝庫の東方に接する東大寺領の小丘に、地下道で宝庫と連絡する横穴式の地下室をつくる計画をもったが、これまた沙汰やみとなった。十六年九月に最終的な疎開方針が決定、正倉院事務所を改装補強して御物を収納し、一部は奈良博に疎開することになった(「東京国立博物館百年史」)。その年十一月荷造りを完了したが、正倉院事務所の改装補強を待っていたのであろう、事務所および奈良博への御物の疎開は二年後の十八年十月に行われる(残った一部は二十年七月に疎開、浄瑠璃寺・常照皇寺への第二次疎開を準備中に敗戦となる。)

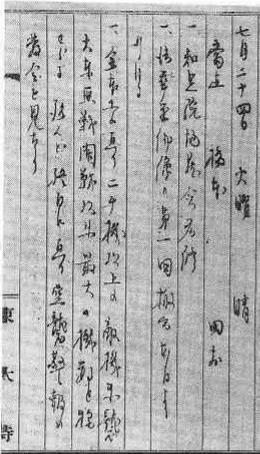
疎開問題から話がそれるが、昭和十八年(魯)、文化財にかかわる二つの事件があった。三月二十六日のこと、新薬師寺の香薬師像が盗難にあった。明治三十三年(六〇〇)と四十年の二回にわたって盗難にあったが、二度とも大阪で発見されて寺に戻っていたのである。こんどは三回目、いまだにその所在がわからない。もう一つはその年十月に、六年前の十二年三月に盗まれて行方わからなかった東大寺法華堂の本尊、不空羅

素観音像の宝冠が大坂府下で発見されたことである。程なく宝冠は本尊の頭上に戻った。

南都諸寺の 昭和十八年（廿五）十二月「国宝・重要美術品ノ防空施設整備要綱」が閣議決定となり、寺社の  
国宝 疎開 国宝疎開が現実の問題になってきた。県では、聖地頭揚課（昭和十七年八月、観光課と合）がこれを担当

した。翌十九年一月、文部省と協議のうえ、東大寺・法隆寺・興福寺の擬装と仏像疎開の実施を決定した。三月下旬、東大寺本坊の調査済の国宝が興福寺に送られ、興福寺の弥勒菩薩像など国宝六六点とともに帯解の円照寺に移された。これが奈良における最初の国宝疎開であった。円照寺は奈良県第一国宝収蔵庫に指定されていたのである。

ひきつづき興福寺では、八月に仏像一七体を円照寺に送り、十月には世親菩薩像など二体を第二国宝収蔵庫に指定されていた大宇陀町大蔵寺に疎開させた。しかし東大寺では、四月に文部省鑑査官・県聖地頭揚課長らと協議会をもち、三月堂（法華）の仏像などについて疎開方針を決め（本尊・執金剛神などはそのまま、日光・月光その他は観音院など境内に疎開）、九月に奈良博から返還された西大門勅額などは、これを大蔵寺に移したりしたのだが、三月堂諸仏の疎開はおいそれとは実施にいたらなかった。天平の塑像や乾漆像がほとんどで、移送中の損傷が憂慮されたからである。翌二十年三月大阪に大空襲があつて、事態はいちだんと緊迫した。この前後、防火池の浚渫・新設や大仏殿中門付近の盛土工事が行



東大寺「日誌」

われたが、大仏殿の大屋根に偽装網がかぶせられたのもこのころのことだったとみられる。大阪大空襲の直後、文部省からは仏像の疎開どころか三月堂そのものの解体疎開を求めてきた。四月十日東大寺は、かねて要請のあつた二月堂登廊と大仏殿袖廊の解体には応ずるが（これまでは山内の反）、三月堂については受

第五章 戦争と奈良

け入れられない旨回答、五月二十五日には大仏殿袖廊の解体工事を完了した。ところが六月一日、一条通り沿いに米軍のB29爆撃機が焼夷弾を投下、衝撃を受けた東大寺では、翌日管長の意志として三月堂の解体を承認する旨県に通告するとともに、仏像の疎開を急ぐことになった。しかし山内には、これに反対する意見がなお根強かった。改めて疎開先の実地調査を行い、七月十三日三月堂で仏像の撥遣法要（仏像の魂を抜く儀式）が営まれたが、その前日執事長が、「法華堂疎開解体問題に関連して信条に於て相容れざる所あり」として辞表を提出、受理されるという一幕もあった。七月下旬、四天王像二体を円成寺に移送、八月八日には四天王像二体、仁王像二体（戦後の十一月、三月堂に戻されたとき金剛力士・密迹力士の間に王像が大きく損傷して）などの正暦寺送りを完了していることが判明した。

表26 寺社の国宝等疎開先

東大寺	添上郡大柳生村 円成寺	三月堂四天王立像
	添上郡帯解町 円照寺	重源上人勸進帳・舞楽面・伎楽面
	添上郡五ヶ谷村 正暦寺	地蔵・不動・仁王・その他
	宇陀郡大宇陀町 大蔵寺	西大門勸額（9個）・二月堂本尊光背・快慶作木造地蔵菩薩立像
興福寺	添上郡帯解町 円照寺	弥勒菩薩木造坐像・薬師経5巻
	吉野郡吉野山 舟知家	阿修羅像など乾漆八部衆立像、その他25点
薬師寺	宇陀郡大宇陀町 大蔵寺	世親菩薩像
	添上郡帯解町 円照寺	絹本着色吉祥天画像
手向山神社	宇陀郡大宇陀町 大蔵寺	木造舞楽面
称名寺	〃	木造薬師如来立像
法華寺	〃	乾漆維摩居士坐像

注 次の3点を典拠として作成した。

奈良女子大学附属高校生徒有志編『奈良の仏像疎開—奈良にも戦争があった—』

『奈良日日新聞』1945年12月1日付記事「古都のお堂へ仏さま帰る」

『朝日新聞』1945年11月14日付記事「国宝続々還る」

竹内勲「太平洋戦争と奈良の『国宝』疎開」（『歴史地理教育』451号）による。ただし、法隆寺・中宮寺・朝護孫子寺分は省略。

した。執金剛神の荷造りを終つて手水屋に安置（柳生村南明寺へ疎開を予定）、日光・月光両菩薩の荷造り作業中に終戦となつた。  
〔『歴史地理教育』四五号所収、竹内勲「大平洋戦争と奈良の『国宝』疎開」による〕

この間興福寺では、二十年七月奈良博から返還された仏像一九体を吉野山の舟知家に疎開している。法華寺では維摩居士像を大蔵寺に疎開したが、本尊については、これを運ぶ担架をこしらえて防空壕へ避難する準備をととのえ、身をもって本尊を守ることにした。薬師寺では吉祥天画像を円照寺に疎開、他の国宝の疎開を準備中に終戦を迎えることになったが、聖観音像に白金が含まれているので、あわや取りつぶされそうになつたこともあつたという。唐招提寺では開山さんと運命をともしるといって、鑑真和上像の疎開に応じなかつた。

## 第四節 敗戦と奈良

### 1 決戦体制下の市民

戦局の悪化  
昭和十七年（二〇四）六月のミッドウェー海戦を機に、太平洋戦争は早くもわが国の不利に傾き、

翌十八年二月のガダルカナル島撤退後、戦局は悪化の一途をたどつた。十九年七月、マリアナ諸島のサイパンが占領され、ビルマ作戦も中止のやむなきにいたつた。十一月からは、マリアナ基地のアメリカ空軍による本土空襲が始まり、翌二十年に入ると、連日のように軍需工場と主要都市が爆撃を受けるようになった。二